

新モデル・コア・カリキュラムが導く 小児看護教育の変革

臨床と教育が共に育てるためのヒント

特集

学生が何をできるようになるかを重視する教育を目指して

特集にあたって

「看護学教育モデル・コア・カリキュラム(令和6年度改訂版)」(以下、新コアカリ)が公表され、わが国の看護実践能力の育成は、従来の教育内容重視の枠組みから「学生が何をできるようになるか」を重視するコンピテンシー基盤型教育(competency-based education; CBE)へと大きく舵を切りました。この転換は、大学や養成所での基礎教育のみならず、臨床のクリニカルラダー、そして生涯学習へと連なる一貫したストリームを形成する強固な基盤となります。

とりわけ小児看護の領域は、こども基本法の施行やこども家庭庁の発足といった社会の大きな変革期にあります。医療的ケア児の増加やヤングケアラー、多様化する家族課題など、私たちが向き合う対象の背景は複雑さを増しており、病院の病棟内にとどまらず、外来や在宅、学校、地域包括ケアシステムといった「生活の場」全体を視野に入れた包括的な支援が求められています。新コアカリは、こうした現代の社会課題や、医療・福祉・教育などの枠組みを越えた多職種・多機関連携能力を明確に内包し、小児看護学教育の可能性を大きく広げるものとなっています。

この新たな教育の枠組みを現場で機能させるためには、これまでの教育実践を基盤としながらも、学生が主体的に考え、行動レベルで学べるよう伴走する役割が、教員と臨床の双方に期待されます。教育と臨床がそれぞれの専門性を生かしながら、手を取り合って学生の導き方をアップデートしていくことが、今まさに求められているのです。

そこで本特集では、新コアカリが導く変革の要諦を紐解くとともに、臨床と教育が共に育てるための具体的なヒントを、全6部・15項目の多角的なアプローチから提示いたしました。

まず【カラーグラフ】では、橋本侑美先生に ICT と高機能シミュレータを活用した小児看護学教育の今を視覚的にご紹介いただき、続く【改訂のポイントと小児看護学へのイン

パクト】のセクションでは、筆者による新コアカリの要諦の解説に続き、西田志穂先生にこどもの権利やアドボカシー、多職種連携の具現化について、西村礼子先生にはコンピテンシー基盤型教育における評価の考え方と方法について論じていただきました。

さらに【学修成果の再構築】として、市原真穂先生らに卒業時目標から逆向きに設計するマイルストーンを、金丸友先生らには基礎科目から小児看護学への積み上げを図るカリキュラム・マネジメントのあり方をご提示いただいております。

これらを踏まえた【新カリキュラムを具現化する教育デザイン】の「講義・演習編」では、平林優子先生によるこどもの主体性を尊重する看護展開への試み、橋本侑美先生による入院生活の疑似体験を基盤とした臨床判断能力の育成、高山充先生による VR シミュレーションの有用性と限界についての報告が集まりました。また【臨地実習編】では、西垣佳織先生らに小児外来実習における学習内容を、天野里奈先生に児童発達支援事業所での実習効果をご報告いただくとともに、大島誠先生には臨床の立場から臨地実習にあたって取り組むべきことをご提言いただいております。

終盤には、大学と現場のギャップを埋めるための【座談会】のほか、【すぐに使える活用ツール】として西田みゆき先生による教育用語の解説、藤田優一先生による「実習振り返りチェックリスト」も掲載しております。

本特集が、教育の場と臨床の現場が「卒業時の到達目標」という共通言語を携え、これからの時代を生きるこどもたちにかかわる看護職を「共に育てる」ための一助となれば幸いです。

荒木 暁子 Araki Akiko

日本小児看護学会小児看護政策委員、
東邦大学看護学部看護学科小児看護学研究室教授、同学部学部長